津久見市議会　総務常任委員会
令和8年度行政視察研修報告
（道の駅視察編：群馬県前橋市と川場村）





今回、なぜ群馬県の道の駅を視察したのか
(群馬県・道の駅視察の目的)

津久見市では現在、中心市街地における「観光交流拠点」の整備について検討が進められている。今回の県外視察では、道の駅を単なる「観光施設」としてではなく、

- 地域の農林水産物・特産品をどのように活用しているか
- 市民と観光客が交流する場として、どのような機能を持たせているか
- 地域経済への波及をどのように生み出しているか
- 行政と民間がどのような役割分担をしているか
- 整備後の施設をどのように運営・維持しているか

という視点から調査した。

今回、川場村「道の駅 川場田園プラザ」と前橋市「道の駅まえばし赤城」を視察し、それぞれ異なる形で地域の交流・観光・産業振興につなげている事例を確認した。

本視察の目的は、成功事例をそのまま津久見市に持ち込むことではなく、津久見市の人口規模、財政状況、地域資源に合った観光交流拠点のあり方を考えることにある。

川場村①　道の駅 川場田園プラザの概要
「農業＋観光」を基礎とした地域づくり

- 川場村の「道の駅 川場田園プラザ」は、1996年4月16日に道の駅として登録され、令和8年度で30周年を迎える。
- 敷地面積：約49,537㎡　事業費：約31億4,000万円,
- 乳製品、ビール、チーズ、パンなどの加工施設の他レストラン・飲食施設、地域農産物の直売、広場・交流スペース、観光・地域情報発信など、多様な機能を備えている。
- 運営は株式会社田園プラザ川場が担い、川場村も出資している。
- 単に「道の駅」を整備したというより、地域の農業・農産物を観光と結びつけ、地域内で消費・交流を生み出す拠点として発展してきたことが特徴である。









川場村②「施設」よりも「地域づくりの過程」

- 田園プラザができるまで川場村では、1955年以降、人口減少が続き、1971年には過疎地域に指定された。 その後、1975年頃から、村の地域振興策として「農業＋観光」を基本とした取り組みを進めてきた。
- さらに、1981年から始まった東京都世田谷区との交流、都市住民との交流事業、地域農産物の販売・PR、農産物を加工して付加価値を高める取り組み、観光客が食事や買い物を楽しめる場所づくりなどを積み重ね、その延長線上に現在の田園プラザが形成されている。
- つまり、現在の大規模な施設が先にあったのではなく、長年にわたる地域づくり、都市との交流、農業振興などの積み重ねが、現在の施設につながっている。

川場村③　津久見市にとって何を学ぶか
「道の駅を造る」ことが成功の理由ではない

- 川場村の事例から重要と感じたのは、施設の規模や配置をそのまま参考にすることではなく、施設を地域づくりの中でどう位置付けるかという点である。
- 田園プラザでは、農業 → 地域産品 → 商品開発・加工 → 販売 → 観光・交流 → 地域内消費　という流れをつくり、地域の産業と観光を結びつけている。
- 津久見市にも、石灰石産業、水産業、農業（ミカンなどの農産物）海・島・リアス海岸、豊後水道の魚介類、既存の飲食店・商店、地域の歴史・文化など、地域固有の資源がある。
- 重要なのは、大きな施設を整備することではなく、津久見市にある地域資源をどのように磨き、交流や消費につなげるかである。

前橋市①　道の駅まえばし赤城
大規模集客型の道の駅

- 前橋市の「道の駅まえばし赤城」は、2023年3月に開業。休憩施設だけではなく、地域観光情報の発信、地域産品の販売、飲食、イベント、交流、防災機能など、多様な機能を持つ施設となっている。
- また、PFIの手法を取り入れ、民間事業者のノウハウを活用した運営が特徴。指定管理者は株式会社ロードステーション前橋上武。
- 開業後の来場者数は非常に多く、令和5年度には約440万人が訪れ、年間100回を超えるイベントも実施された。







前橋市②　「集客」と「民間活力」
施設を造った後の「運営」が重要

- 前橋市の事例で注目したのは、施設そのものだけではなく、開業後にどのように人を呼び、施設を使ってもらうかという運営面である。
- イベントの開催、メディアへの情報発信、地域産品の販売など、施設を継続的に活用することで、単なる休憩施設ではなく、目的地としての役割を持たせている。
- 一方で、規模の大きな施設であるため、維持管理、運営体制、指定管理に係る経費、イベント等の継続、集客を維持するための取り組みなど、施設を長期的に維持していくための視点も必要になる。
- 「建設して終わり」ではなく、「誰が、どのように運営し続けるのか」が重要である。

前橋市③　津久見市への示唆
前橋市の規模を、そのまま津久見市に当てはめない

- 前橋市は人口規模、都市圏、交通量、商圏、観光客数などが津久見市とは大きく異なる。したがって、年間数百万人規模の集客を目指す施設を津久見市でそのまま再現することは現実的ではない。
- 一方で、参考になる点として、計画段階から民間事業者の意見を取り入れる、イベントなどによって継続的に人を呼び込む、地域産品を販売するだけでなく、地域内消費につなげる、観光客だけでなく市民も利用できる施設にする、施設単体ではなく、周辺地域への回遊を生み出す。といった考え方がある。
- 津久見市では「何人集められるか」だけでなく、「市民が日常的に使えるか」「地域にどのような経済効果が残るか」という視点が重要である。

県外視察の総括
川場村と前橋市から見えてきたこと

＜川場村＞

長年の地域づくりを基礎としている、農業と観光を結びつけている、都市との交流を継続してきた。地域産品の加工・販売などを通じて地域内消費を生み出している

＜前橋市＞

大規模な施設による高い集客力、PFIなどによる民間活力の活用、イベント・情報発信など運営面を重視、観光・地域産品・防災・交流など多機能化

※両者に共通しているのは、「施設そのもの」ではなく、施設を核として人・地域資源・産業をどうつなぐかという点である。この視点を津久見市の観光交流拠点整備にも生かす必要がある。

＜視察参加委員の所感＞

（内田委員長）

川場村は昭和５０年に当時の市長が本格的に「農業＋観光」路線を立ち上げ、それを継続してきたことが、現在の田園プラザの成功につながった。やはり、村の存続を賭けるほどの首長の覚悟がなければ成功しないし、その意を受け、熱意ある職員がいなければ成功しなかったと感じた。

一番印象に残ったのは、「物を作るのは簡単。施設はなんとかできたとしても、一番大事なのは、事業を継続すること。それには、行政マンが経営してもダメ。ノウハウがある人が大事である。」ここが、津久見市が街なか観光拠点を整備するにしても、一番のポイントになる気がする。

道の駅まえばし赤城では農家の側に立って販売最低価格を決め、安売りをしない姿勢に好感が持てた。

（丸木副委員長）

川場村は「農業＋観光」を打ち出したことにより、村民一体となった戦略に驚かされた。「道の駅ランキング」1位という輝かしい実績にうなづける取組内容であり、売られてる物産だけではなく、多くの体験型サービスも魅力的だった。道の駅 まえばし赤城はPFIの導入による「道の駅」としての運営を知ることができた。

（知念議員）

川場田園プラザは、1993（平成5）年に運営会社が発足し、1998（平成10）年にグランドオープンしました。過疎地域だった村が「農業と観光」を軸にした村おこしの一環として計画し、現在では年間300万人近くが訪れる全国屈指の人気道の駅へと成長しています。駅長の宮内実氏から説明を受けました。話が進むにつれて彼は、この仕事と人生を共に歩んできたこと、苦労の連続であったことがよくわかりました。

道の駅まえばし赤城は主要幹線道路に面した優れた立地条件に加え、温浴施設や温室バナナ農園といった、他施設との圧倒的な差別化を図るコンテンツが整備されている。これらは初期投資や運営ノウハウの面から一級の模倣困難性を有しており、単なる特産品販売にとどまらない「目的地型道の駅」の成功モデルであると感じた。

（高野議員）

先進地（成功事例）の視察をした際に共通するのは、熱い思いを持った核となる人がいることです。今回の川場田園プラザや前橋市の道の駅もその一例と感じました。道の駅の運営において、私自身最も重要と思うことは、そこに優れた経営者がいるかどうかです。津久見市の道の駅をだれが経営するのか。難問です。

（井戸川議員）

今回の群馬県における道の駅の視察では、津久見市が今後検討している観光交流拠点については、他自治体の成功事例をそのまま参考にして大規模な施設整備を行うのではなく、津久見市の人口規模、財政状況、観光資源、既存商店街や地域事業者の状況等を踏まえ、改めて「本市に本当に必要な機能は何か」を考える必要があると感じた。

その一つの可能性として、「大屋根広場」のような全天候型の交流空間が考えられる。今回の視察先でも国の交付制度を活用した「大屋根広場」の施設も見学した。重要なのは、施設を整備すること自体を目的とするのではなく、その場所で「誰が、何をして、どのような人が集まり、地域にどのような効果を生み出すのか」を明確にすることである。



